

『懷硯』 試論

——伴山の存在と共鳴し合う当代説話——

有 働 裕

一、見えない水子の霊

『懷硯』（貞享四年刊）巻四の三「文字すわる松江の鱸」は、以下のような一章である。

神無月の朔日、伴山は出雲大社を詣でた。その近くの草庵では、若い娘が黒髪をおろして尼になるところであった。どんな事情からかと思物人に尋ねたところ、次のような話をした。

出雲大社の傍らに住む浪人拵拵丸之助は、密かに墮胎薬を売り、富貴に暮らしていた。その娘は美女であったが、縁付いてもなぜかすぐに離縁されてしまう。四、五年の内に五か所から去られて嘆いているうちに、丸之助夫婦は疫病で死ぬ。娘は隣りの男に求婚されて祝言をあげ、初夜を迎えるが、娘の寝姿に多数の水子の霊が取り付いている様が見えたため、すぐに離縁される。そうとは知らず、繰り返

返される不幸を嘆き悲しんだ娘が出雲大社に詣でて、その理由を問うたところ、親の犯した罪の報いによる我が身にあさましい有り様を霊夢で知らされる。それにより発心した娘は、さらにその帰り、松江で拵拵丸と記された鱸があがったのを見て親の霊に違いないと思い、いつそう信心を深めた。そして、親と赤子の菩提を弔うため尼となるところだという。

数奇で哀れな娘の運命を語った一章といえるが、いくつかの説話的素材の組み合わせによって成り立っている。墮胎された水子の霊が報復するという怪異譚、縁結びの神である出雲大社が因果を説くという霊夢譚、罪深いものが死して魚となりその身に痕跡を残すという因果応報譚。いずれにせよ、仏教的な教訓色が濃厚で、これらは相互に響きあって墮胎の罪深さを強調する一話を形成している。

もちろん、そういった古典的ともいえるパターンの組み合わせだけで成り立っているのではない。当時の読者にとって耳新

しい話題も取り入れられていた。前田金五郎氏は、鱸に文字が記されていることについて、『山鹿素行年譜』貞享元年三月十六日の条に「能州ヨリ大鱸ヲ献ズ云云。長四尺余、上ニ文字四アリ。」と記された事件との関連を指摘している（注一）。また、箕輪吉次氏は、殺生の報いにより魚に生まれ変わった話として『摂陽奇観』巻十七「鯉塚の由来」をあげ、この鯉には文字ではないが巴の紋があつたことを指摘している（注二）。しかしこれらは本章の部分的な趣向についての、一素材としての可能性を指摘したにすぎない。

やはり、「文字すわる松江の鱸」全体の展開上の骨格ともいうべきものは、説話文学と深い関連性を持っている。仏罰により動物と化す応報譚は仏教説話としてはありきたりのパターンといえ、類話は多数ある。また出雲大社の神が自らの無力を霊夢で告げるところは、『宇治拾遺物語』巻三の十四「伏見修理大夫俊綱事」の熱田神宮との類似を指摘することもできる。そして、墮胎の罪という主要素と水子の霊が多数とりついている報復という最も印象的な場面から考えれば、次に引用した平仮名本『因果物語』（寛文年間刊）巻五の六「はらみ子をおろして、むくひける事」が、本章に最も近似した話といえるだろう。おそらくは直接これを利用したか、あるいは、同系統の伝承によつたものかと思われる。

京の五条、西の洞院に、七がか、とて、子うませの隠婆おば有しが、しかも、子をおろす事の上手也、はらみたる女ども、

たのみにゆけば、毒をさして、子をおろし、賃をとりて、ゆるくくと、世をわたる事、年久し

承応のはじめ、わづらひつきて、打ふし、大熱氣おびた、し、目は、血を入たるごとく、赤くなり、耳はつぶれて、きこえず、手あしを、あがき、そのこと謔言には、あら、おそろしや赤子どもの、四方より、あつまりて、我にとりつき、せむるぞや、手あしへも、うしろへも、くらひつきて、さいなみ、髪の毛を、かなぐりて、ぬくなり、あら、いたや、くるしや、これく、みえぬか、とりのけて、くれややく、と、いふ

西寺町、西方町の長老をよびて、さまく、す、めらるれとも、耳にも、いらず、人をも、見しらす、あがき死にしけり

命のうちに、日比の悪行のむくひけるこそ、かなしけれ、まして、来世の事、おもひやられて、あはれなり

この『因果物語』巻五の六と「文字すわる松江の鱸」との相違点としては、墮胎した本人にではなく、その娘に赤子が取り付いていることがまずあげられる。もちろん丸之助夫婦も崇りによつて病死したと考えるべきかもしれないが、その死の記述は娘の悩み苦しみに比べてきわめて簡略で、立ち入った憶測を拒んでいる。

さらに、『因果物語』では、取り憑いて責める水子の霊が本人にしか見えないという怪異であつたものが、「文字すわる松

江の鱸」では本人だけが見ていない、他人にしか見えない、という展開に変わっている点が注目される。

二、怪異と向き合わない伴山

近代的な発想で考えれば、『因果物語』の方がありえそうな話ではある。「脳脚幻覚」——脳の中の睡眠と覚醒のリズムをつかさどる部分の付近を犯された患者が見る幻覚——のパターンには、数多くの奇妙な形の小動物や小人が現れてまとりつくというものがあるという（注³）。だとすれば、人々が実際に『因果物語』に記されたような「事件」に遭遇することもあると考えられよう。また、山岡元隣の『百物語評判』（貞享三年刊）に見られる程度の合理的精神があれば、堕胎を商売としてきた者が良心の呵責にたえかねて気の迷いを起こし、幻覚を見たとすることもできただろう。

それに比べれば、「文字すわる松江の鱸」のように、赤子の霊が本人以外の者に見え、本人には見えないという方が、ありえない話である。そのような主筋に、他の奇談的要素を組み合わせた展開なのだから、怪異性はいっそう増幅されているといえよう。にもかかわらず、この一章を、単なる非現実的な怪異譚として読み過ぎことはできない。なぜなら、娘の結婚願望とその挫折という、きわめて現実的な心情に比重をかけてこの一章がまとめられているからである。

祝言の翌日待たずに離縁されるのが四五年の内に五回繰り返され、「いまだ縁のきたらざるもの」と悔やみ続けた果てに、六度目も同じ結果となつて「是はいかなる因果。もはや縁のみちは絶へたり」と自暴自棄になる。それでもあきらめ切れずに、出雲大社にその理由を訪ねる。水子の霊の復讐が、自分だけ見えない怪異であつたからこそ、この苦しみは長く続いた。いわば西鶴は、怪異の見え方を『因果物語』とは変えることによつて、結末を遅らせたのである。娘の目に見えてしまえばすぐに結末（発心）へと至つてしまふ展開を、苦悩の末に悲しみと疑問とが極限に達するまで引き伸ばす。そして、その憤りに近いともいえる感情を一気に転換させて発心へと至らせたのが、出雲大社の霊夢と親の名を記した怪魚という二つの怪異であつた。娘が自分には見えない水子の霊の存在を受け入れて結婚願望を封印してしまうには、あるいは、そういった展開を読者に自然なものと感じさせるには、このような二段構えの罪の報いが必要とされたのであろう。

怪異を否定して現実を描くのではなく、怪異性を高めつつそれを利用して現実的な「世の人心」を描いた——典拠・類話との比較からはこのような結論が導き出せる。もつとも、以上の説明だけでは、叙述の詳細に立ち入ることなく構成面の分析のみによつた、性急な結論と言われかねない。そこで忘れてはならないのは、娘の心情を凝視するように読ませる上での、伴山の果たしている役割である。

『懷視』の多くの章がそうであるように、「文字すわる松江の鱸」の中での伴山に関する記述は、冒頭と末尾のみである。そして、これまた他のほとんどの章と同様に、伴山は事件そのものに直接かわることなく、傍観者の位置にいる。

神無月の朔日の日出雲の国八重垣の宮居にまふでけるに。海辺浪高く松にあらしひゞきて殊更に神さび。社僧神主の外民家の門を開て。むかしよりの教を守りよろづの鳴をしづめける。まことに日本の諸神此大社にあつまりたまひて。男女の縁をむすび給ふといへり。其二柱を立出かたべなる杉むらの茂き一里に入しに。四阿屋づくりの藁薺の庵に。八十餘才の法師真言律をおこなひすまし。取殊勝に住なされけるに。おのづからの生垣を破り。あるひは片板戸押たをして。南面の縁側西の欄。人みな立こぞり物見るけしき。いかなる事ならんと我も其人なみに立のぞけば。いまだ襦ふさきてまのなき女のうば玉の黒髪をみづから鉢にして散行柳のけうとく。あたら花の春をまたずや。こはいかなる事とたづねしに上髻りんとつくりたる男のかたりけるは。この冒頭部に示されているように、丸之介の娘と直接に向かい合い、その親の罪深さや報いの恐ろしさを正面から受け止めようとしたのは、八十余歳の真言律宗の僧であり、伴山は一見物人にすぎない。そこが、能に登場する「諸国一見の僧」、『撰集抄』の西行、あるいは『近代艶隠者』（貞享三年刊）の西鷺軒橋泉など、伴山の前身ともいふべき者たちとの決定的な違い

である。伴山は、娘の背負っている罪や因果と——そして、その報いである怪異とも、向き合おうとしない。「花の春」を待たずに若くして髪を下ろすことを惜しみ、その心のありように関心を抱くというのは、いわばありきたりの関心の持ちようである。

それゆえに末尾も、

いよく後世のいとなみして彼これの菩提を祈らんと。此老僧に頼みて剃髪するにて待るとかたりけるを聞にあわれましぬ

と、きわめてありきたりの感想がわずかに述べられるにとどまる。深遠な真理や痛切な教訓の提示はなく、人格者伴山を印象づけるほど特異な要素は何もない。まさに平凡な見物人として、娘の背負い込んだ因果よりも、因果を背負い込んでしまった娘の心のありように目を向けているのである。言いかえれば、結婚願望を信仰によつて封じ込めようとする娘の、その信仰心の殊勝さ以上に、そうせざるを得ない理不尽さを読者に読み取らせることになる。娘が納得して出家しようとしているにもかかわらず、親の悪行が子の幸福を踏み躪ってしまうことの悲劇性の方を喚起するのである。

三、伴山の視線

きわめてありきたりの感慨しか述べていないものの、存在そ

のものが一定の読みの方向性を読者に示すものになっている
——はたしてそれは、他の章でも言い得ることなのか。また、
そう言うてみるのが、個々の章の読みにどれほどの有効性を
与えることになるのか。そして、もしそうであれば、「集」と
しての『懷硯』全体はどのような方向性を示していることにな
るのか。

結論を急がず、まずは具体例をあげて検討してみたい。たと
えば、「文字すわる松江の鱸」と同様の伴山の役割を、巻一の
二「照^{てり}を取^{ひら}舟の中」にも見出すことができる。「人の身はつ
ながぬ舟のごとし」で始まるこの章は、以下のような内容であ
る。

伏見で大坂への昼の下り船を待つ伴山は、折よく借りきり
の船に便乗させてもらうこととなった。船の借り主は、播
磨の浄土坊主・近江の布屋・長崎の町人・大坂長堀の材木
屋の一子清兵衛の四人であった。清兵衛はかつて親が始末
を重ねて貯めた金を色の道に使い捨て、二十二歳の時に勘
当された男であった。江戸を経て越中に行き、五年間苦勞
した末に金子三百両を仕出して、その地の宝と言われるほ
どの商人となった。この旅は、故郷に錦を飾り、両親と再
会するためのものであった。だが、ふとしたはずみで船中
でのカルタ博奕に加わってしまった、八軒家に着いた時には、
他の三人に全財産を取られてしまっていた。清兵衛は仕方
なく、わずかな路銀を船頭が取った寺銭の中からめぐんで

もらい、長堀には帰らずに、歩いて越中に戻って行った。

梗概のみから判断するなら、まさしく「人の身はつながぬ舟
のごとし」の具体化であり、人の世の無常を感じさせる一話で
ある。また、博奕の恐ろしさを印象づける教訓譚とともること
ができる。末尾に、

かりにもせまじきものは博奕^{ばくち}わざ家をうしなひ身を捨^するの
ひとつ是ぞ。

と、きわめてもつともな教訓が明示されているとなれば、無常
感と教訓性に読解上の重点を置くべきことはもはや決定的とい
えそうだが、続く最後の一文を見落としてはならない。

前ぶたに三つがあがるにしておからせましき物ぞ

「前ぶたに三つがあがる」が、前の者が出した十（ぶた）の後
に三枚続けて札が出せる意か、前札（配り札）で既に三枚の役
がそろっていたことなのか、明らかにしない。ただ、博奕に
熟知したものの口調となっていることは間違いない。つまり相
当に遊び慣れた者の目から見て、清兵衛の迂闊な行為を皮肉つ
ているのである。この態度は、美女と戯れ魚鳥も食す艶隠者で
あった（巻一の一）という伴山の設定とも一致する。つまり、
火床の前——船尾に腰を下ろして一部始終を見物している伴山
には、真面目に教訓するつもりはさらさらないのである。

無常観や賭博の戒めといった生真面目な視点を放棄して、清
兵衛をやや突き放しながらこの一章を読み直すならば、たちま
ちそこに、「家をうしなひ、身を捨る」どころか、賭博でしっ

かりと稼いで立ち去っていく、他の者たちの姿が浮かび上がってくる。

たとえば、小者たちが始めた博奕に手を出した清兵衛は、播磨の長老らの参加によって切り上げる機会を逸してしまうのだが、その場面は次のように描かれている。

てんがうにするうちに銭八百まけになれば。是切といふ所へ播磨の長老す、み出。後生大事にひねりければ九品の浄土かふとて。衆生残らず根から取れば。ひたものに置かけつゝめ板一歩せんさくに成。長老六七両も勝たまへは近江の布屋さし出。長崎の人大氣にかゝり。三番まきに付目取て山のごとく置立しに。

傍点を付した「九品の浄土かふ」は九（かぶ）と九品をかけた駄洒落であるが、同様の言い回しは軽口本『鹿の巻筆』（貞享三年）の「三人論議」にも、「九枚もつは九品の浄土、後生に入るねなり」と用いられている。これは、博奕好きの若者が何でもその用語にからめて説明するさまが笑いを誘うものであるが、これと同様の卑俗で軽薄な調子でこの僧が博奕に加わってきた印象を与える。世事に疎い僧が好奇心から初めて賭けてみたものではなさそうである。

そして、この僧が清兵衛から巻き上げた金銭は、あろうことが、本山から住職の認可を得るためにかかった経費の埋め合わせに使われる。

つゝきて播磨の長老の仕合百両餘も勝て此度の京の入用を

してやり不慮に能同船を致しましたと念比にいとまこひおかし。

この「此度の京の入用」の内容は、先に「此たび長老になりての帰るさ」とあることから、知恩寺に支払われたものであるとわかる。幕府によって整備された本末制度にかかわる、かなりスキャンダラスな内容が描かれているといえよう。

他の二人の乗客はどうか。これもまた素人ながら博奕に手慣れているという印象を受ける。

まず「近江の布屋」はいかにも手堅いことで知られた近江商人らしく行動している。

布屋は小判十四両と絹綿取て。洪紙包にさせて舟より足ばやにあかり。こもどりして船頭を呼かけわらんちかけが片足あるはづじや見てたもれと。是まで取て帰る

その手堅さのままに博奕を行っているところがおかしい。「長崎の町人」は

舟は八軒屋につきて長崎人氣嫌よくあがればと記されるのみだが、計算上百五十両ほどは手にしていることになる。つまりは一番もうけたはずである。長崎商人といえは富裕で派手、そしていささか投機的なイメージもあり、近江商人とは好対照の存在である。その両者がそれぞれに賭博の「恩恵」にあずかり、喜々として下船している。

さらには船頭も十両ほどの寺銭をせしめている。そもそも櫓米櫃から布袋屋かるたを取り出したのは船頭であった。

近世初期において博奕に対する処罰が厳しかったことはよく知られており、博徒であれば死罪獄門あるいは流罪、素人の場合は追放などといった御仕置の例が見出せる。もちろん取り締り切れぬほどに流行していたわけだが、この「照を取る昼舟の中」の世界のように、白昼堂々と一寺の住職とひとかどの商人が大金の動く博奕に参加しているという光景は刺激的である。しかもそれが、博徒にそそのかされたのではなく、清兵衛のようにそこそ腕に覚えのある者から全財産を巻き上げてしまうような、年季の入った博奕好きとして描かれているのである。このような側面は、無常観や教訓性のみで清兵衛の運命を大真面目に論じたときにはすべて見落とされてしまうものである。月並みな教訓を、卑俗な態度でつぶやく伴山の人物像を前提として、この一章のオリジナリティは成立しているのである。

四、先行研究の中の伴山

『懷硯』という作品において、伴山はいつたいどのような存在なのか。先行研究での扱いは、無視してもかまわないとするものから、作品解釈の要として重視するものまで、さまざまである（注4）。

伴山という人物の設定が、趣向あるいは手法として決して成功していない、ともしばしば評されてきた。その場合は、諸国を巡り歩くというタイプの文学作品であるならば本来はこうあ

るべきだ、というモデルが仮想され、それと伴山との落差が問題にされる。

たとえば、謡曲における諸国一見の僧や『撰集抄』における西行のような存在が比較の対象として意識されたりする。見聞する僧が何者かと出会い、会話し、深い感銘を受けて一話が完結する——そのような主情的な世界の求心力を伴山に求めるのであれば、『懷硯』には失敗作のレッテルを貼らねばならなくなる。仮に伴山の全く登場しない章がいくつかあることに目をつぶったとしても、先にも示したとおり、伴山の感想らしきものは傍観的であつたり、主要な題材や登場人物に焦点が合わせられていないことが多いからである。

それゆえに、片岡良一氏は、伴山の設定について、

浮世草子作者としての西鶴が好んで用いた技巧であるが、例によつてその技巧が完全に全編を包み切つてはいない。

（中略）大体としては、純然たる短編集として取扱つた方が相応しい。（注5）

と述べている。暉峻康隆氏も「五卷二十五話はそれぞれ独立した短編として取扱うべきものである」（注6）とその見解を継承した。

確かにこの作品は、作品全体を伴山の人格が包み込んでいたり、作品世界すべてが伴山の心情に収斂されていくようには書かれてはいない。これはまぎれもない事実である。

しかしながら、その後の『懷硯』研究は、その不完全な手法

を完全であるとみなす、あるいは、不完全な部分を想像力で補って完全なものと仮定して論じる、という傾向を強めていったといえる。

たとえば、伴山を西鶴の分身のように見なそうとする解釈の系譜が存在する。これは、成立論あるいは私小説的な発想の一類型であり、執筆時の西鶴の実像に迫ろうとする強い欲求に支えられている。しかしその手掛かりとすべき伴山の述懐に元来ありきたりのものが多いために、どうしてもそれらをオーバーに解釈して、人格者西鶴、人生の批評者西鶴の像を無理に作り上げる傾向が強くなってしまう（注7）。

一方、伴山を西鶴そのものの人格とは切り離して、あくまで小説手法の問題として扱う論もなかった。伴山を作品全体にかかるフィルター——「古い」あるいは無常感の色合いに染めて見せるための——ととらえる発想、あるいは『懷硯』全体をいくつかの回路からなるネットワークとしてとらえ、その要に伴山を置くという発想である（注8）。

これらの論考は、手法としての伴山の可能性を示し得た点において意義深い、これもまた作品中の伴山の実態からは乖離する傾向を持つ。伴山という存在は、作品全体にかかったフィルターと呼ぶにはあまりに綻びが多く、ネットワークの要と呼ぶには存在感が希薄なのである。

五、伴山の存在と重層構造

伴山の実態から目をそらせることなく、改めて個々の章の読みを検討してみるならば、傍観者としてありきたりな感慨しか示さない伴山の存在が、作品世界の重層性を保証していることが見えてくる。巻一の二では、かるた賭博の恐ろしさを描きつつも、そこから少し視点をずらすことで、それとは裏腹な現実が浮かび上がってきた。巻四の三では、墮胎をめぐる因果応報譚の枠組みの中で、結婚願望を理不尽に封じ込められた娘の苦悩が見え隠れしている。各章の中心的な題材に伴山が正面から向き合わないことが、多層的・多声的な読みを可能にしているのである。

今少し具体例をあげてみたい。

巻一の三「長持には時ならぬ太鼓」は、手短にまとめてしまえば、貧困の中でも武家らしい誇りを失わなかった父親と娘がそれゆえに報われるという一話である。結びには「武士はたのもしきものにぞありける」とあって一応は武士道賛美の姿勢が示されているものの、それが一貫しているとは言いがたい。そこには、西国武士の横柄なふるまい、改易によって極貧にあえぐ由緒ある武士の暮し、隠し遊女の繁盛とそこへ群がる客の姿なども印象的に描写されている。

また、冒頭部分に示された伴山の次のような述懐は、無常観が濃厚に表れているが、それでいて堺町の芝居に興じる観客の一人でもあるという具合に、矛盾した要素を含んでいる。

老若（おれとわが）しばしの氣（き）を移（うつ）して、生死（しじ）の堺町（さかいまち）を見物（みぶつ）人は今（いま）もし

れず。息引取は墓なき貨籙を片手にして。圓座所せきなく
数千人の貞つき都であひ見し近付とはひとりもなし。世
界の広き事のおもはれる

単色のフィルターのイメージには収まり切らない伴山という
存在。そのことに対応するように、この一話の構成要素は多様
で、単純な報恩譚としてまとめられることを拒否している。と
りわけ、「死ぬる事さへ我ま、ならず」という疲弊した武士の
家庭の「島つゞき」に隠し遊女を置く茶屋があり、船頭や駕籠
かき、百姓が「わけもなく入みだれて」という対照は印象
的である。

これらの諸要素は、堺町・八丁堀・築地・鉄砲洲といった視
点の移動とともに順次描かれ、娘に救われた浪人が帰参後に再
び訪れるまでの長い時間の経過の中で語られている。見聞記と
しての形式は無視されているといつてよく、伴山の存在は、こ
れらの重層的な展開を傍観者の立場からどうにか束ねているに
すぎない。末尾の「武士はたのもしきものにそありける」とい
うありきたりな伴山の述懐を超えて作品世界の内実は拡散して
いるといえよう。

巻一「案内」の「寝所」は、そのあまりに悲劇
的な結末に対して、語り口は冷淡に過ぎる。冒頭では、この話
の舞台となる家（絵）島が徹底的に見下されている。

淡路島かよふ衛のなく聲に、世のあわれ見る事あり家嶋と
いふみなどに舟かゝりして。一夜をあかすにさりとはおも

しろからぬ所なり。むかしの小者に花の家じまとは何か目
に見へてうたひけるぞ。春さへ櫻もなく秋の夕暮の心して。
浦の苦屋に立よりけるに女あつまり茶事したのしみ。あ
りふれたる姫そしり咄すへき者が。物毎いそぐ事には仕
違ひありと。分別らしき物かたり何事ならんと聞に。

そして、一年ぶりに帰郷した久六が、妻とその新郎となった木
工兵衛を刺し殺し、その刀で自害するに至るといふ顛末が語り
終えられた後も、

鄙びたるおとこの仕業には神妙なる取置ぞかし
という、突き放した感想で結びとなっている。

この話が『伊勢物語』第二四段を下敷きとしていることにつ
いては既に指摘があるが、それと比較してみるならば、本話は
単なる夫婦の別離にかかわる悲劇ではなく、家族や周囲の者の
意識、とりわけ「孝行」の強要ということが悲劇の大きな要因
となっていることは明らかである。「物毎いそぐ事には仕違ひ
あり」とあるその急ぐ理由がまさに幕府によって奨励されてい
た孝行であった。

伴山の語り口は、あたかも、久六やその妻に対してのみ感情
移入して読む姿勢を拒否し、「神妙なる取置」へと二人を追
込んだものに冷めた視線を向けさせる装置のようでもある。そ
れゆえに、「個人の意志や感情をじゅうりんしてはばからない家
族制度に対して」批判を加えた一章（注9）という印象を与える
こととなる。

また、伴山自身の感想はほとんど記されず、伴山以外の語りの、それ以外の外れで平凡な教訓のみが記されているような章もある。

卷三の一「水浴は涙川」は以下のような展開になっている。

伊勢の山田の中世古に住む松坂屋清蔵は嫁を得て人付き合いが悪くなり、それを恨んだ謡講仲間と師匠の五人が偽って、お前の女房は持病の癩癧を隠していると告げる。それを信じ込んだ清蔵は妻を一方的に離縁してしまうが、後日偽りであったと知って悔やむ。その妻の二度目の婚礼を目の当たりにして逆上し、脇差を持って五人を追ひ回したので、旦那寺の長老らが仲裁に入って、それぞれの女房をみな離縁することで収まった。

夫の誤解によって一方的に妻が離縁されてしまうという、当時の婚姻のあり方の問題が露呈している一章といつてよい。伴山の泊まっていた宿の亭主の、

その、ちまた此宿へ通りがけに立よりけるに人うつけたりとて、^{おかしな}勘まじき事とて。亭主のかたりけるは。

ということばに導かれて始まり、そしてまたこの章の末尾は、宿の亭主のものか伴山のものか判然としない述懐だが、

総じて此たぐひの悪口いふまじき事なり

とあって、冒頭の教訓と対応している。だが、女房の苦渋の深さ、亭主の悔恨の重さを思えば、冒頭の宿の亭主の語り口は的外れであり軽薄である。

本章を一読すればわかる通り、印象的なのは、理由も明らかにされないままに離縁されざるをえなかった女房の哀れさと、離縁してしまった後に誤りと気づいた清蔵の悔恨である。清蔵をだました五人に重きが置かれていないことは明白であり、「ここ」では世の人心として、世間の妬みや冗談半分の告げ口をするという無責任な取り上げられているようにみえるが、根底には、女房という立場が三行半によって簡単に解消されることを前提にしていると思う（注10）といった読後感もそれゆえに生じるのである。

本章の語り口に教訓性というフィルターがかけられているとするなら、その役割は作品世界全体を単一色に染めるような単純なものではない。言ってみれば、赤い色のフィルターによって、青緑色の物体が浮かび上がってくるような「フィルター効果」である。「対立する二つの要素によって構成される統一体としての表現にあつては、一方の要素の存在が強調され、明確にされれば、他方の要素の存在も明確になる」というような効果が生じているのである（注11）。

このような重層的な作品世界——複眼的な視座の確立と伴山の存在との関係を最も明瞭に示しているのが、巻四の五「見て帰る地獄極楽」であるように思われる。讃岐の空楽坊という僧がさまざまな奇跡を起こして民衆の尊崇を集めるが、それを国守がトリックと見抜いて厳しく責め立て、ついに白状させるという一章である。以前に言及したことがある（注12）ので詳述は

避けるが、国守の取った処置が結局は里人の仏壇・仏具の破棄や寺院の荒廃に結びつき、その「邪見の浜里」の有り様を見てただ呆然とする伴山の姿が冒頭と末尾に記されている。このような伴山の存在に注目しつつ、当時の幕府の仏教統制策と排仏論の流行、岡山藩や水戸藩での厳しい寺院整理などを視野に入れたとき、この一章は国守への賛美に収斂することない重層的な広がりを見せ、ある種の危うさまでも内包しているように思われてくる。

六、伴山と『懷硯』の世界

伴山は『懷硯』の世界をゆるやかに束ねているにすぎない。常に傍観的で求心力の乏しい語り手である。そのことが、個々の章についての重層的・複眼的な理解を保証していることについては、先の章で述べた。しかしながら、『懷硯』全体を「集」としてとらえ直すと、そこには新たな意味が見えてくる。

伴山は求心的な役割を果たしてはいない。にもかかわらず、とりあえずはその見聞記であるという印象が読者には与えられる。「集」の導入部である巻一の「一や一」においては存在感を持って描かれ、また伴山が直接話の展開とかかわっているような章も、全巻を通してほどほどに配置されている。つまりは、伴山の登場しない章をも含めて、読者は伴山と時間を共有しつつ読み進めているような印象を持つことになる。たとえば実際の

見聞記としてはありえない記述——伴山が知り得ないはずの内容が記されているなど——があったとしても、そのような印象が伴ってしまうことは確かである（注13）。

そして、読者が伴山とともに共有することになる時間には、ある限定がかけられている。それは、伴山の旅立ちを記した巻一の「二王門の綱」が、頂妙寺の総門の仁王像（注14）が洪水によって流出する事件を素材としていることによる。これは延宝四年五月に実際に起きたこと（注15）であり、『両吟一日千句』（延宝七年刊）にも、

時に仁王も動き出たまふ

西鶴

頂妙寺たまりもあえぬ洪水に

友雪

という句が見えることなどは、既に諸注に記されている通りである。とすれば、『懷硯』はその刊行時の読者から見て、この過去十年ほどの出来事を書き記した見聞記であるということになる。

もちろん延宝四年という旅立ちの年が厳格に意識されていたとは思えない。巻一の三に記された玉川千之丞の江戸に下つての中村座での興行は寛文元年のこととされており（注16）、延宝四年からは十五年もさかのぼってしまう。巻二の二の題材となっている堺の夷島出現にしても寛文八年のことであり（注17）、各章の題材となった可能性の指摘されている事件等には、延宝四年以前のものが他にもある。

しかし、それらを視野に入れても、『西鶴諸国ばなし』に記

されている年号、元和や寛永と比較して、近年の出来事といえることは確かである。そしてそれ以上に重要なのは、冒頭の一章によって、読者がここ十年ほどの伴山の見聞記と錯覚してしまいうような書き方がなされているということである。少なくとも『懷硯』という作品世界の時間は、伴山という虚構の肉体を通して、ある程度の密度を持った同時代の出来事として意識されることとなる。その時、各章の中に散在する互いに関連し合う要素が、連想の糸でつながり合われ、まさに「同時代」の姿を浮かび上がらせるネットワークを形成することになる。

誰もが気づくことではあると思うが、『懷硯』の中には繰り返し類似した内容や題材が登場する。

たとえば、

男伊達——一の三・二の三・五の三

武家の困窮——一の三・三の五・四の一・四の三

農村の荒廃——四の一・五の一

商人の不正・犯罪——一の二・二の一・四の一・五の一

僧の墮落・破戒——一の二・四の一・四の五

華美な若衆風俗——一の五・二の五・五の五

孝行の矛盾——一の四・二の四・四の二

結婚と離縁——一の四・二の一・三の一・四の三・五の

一

奇跡・怪異と民衆——一の一・三の二・四の五

このように並べて見ると、いかにも社会制度の矛盾や世相の荒

廢に話題が集中しているように思われてくる。『懷硯』に一般に「異常な、暗い、不幸な話が多い」(注18)という印象もこのようなところに根差しているのだろう。さらに個々の素材について考えてみるならば、かなりスキャンダラスな話題が用いられている。

巻四の一「大盗人入相の鐘」に出てくる梅倉徳介が盗賊となつたいきさつには、出羽秋田藩の家老の徒歩若党が行った乱暴狼藉の隠蔽がからんでいる。いずれの藩でも似たような状況であろうが、当時の秋田藩は家老の絶対的な権力の下で職制の改革などが積極的に行われており、徳介のような「氏系図家中に肩を並るもの」がいけないほどなのに「功なくして禄を不足に」思う者はまさに邪魔な存在であつたはずである(注19)。

巻三の五「誰かは住し荒屋敷」では、下総須賀山の領主が二人の無実の腰元を拷問の末に殺し、その怨念によって一族が滅んでいる。下総の大名、無実の罪による処刑、その祟りによる乱心・滅亡といったことから連想されるものに佐倉惣五郎の伝承がある。惣五郎の死は一説に承応二年、堀田正信の自害は延宝八年である。この伝承の現存する記録は近世中期以降に筆写されたものであるが(注20)、口承等で流布していたこの「事件」と共鳴し合うようにこの一章が書かれたとも考えられる。

巻五の二「明て悔しき養子が銀貨」は、多額の借金を踏み倒し、身代わり殺人まで犯した松崎九助の罪が、問われないままに結びとなっている。それも殺人を犯した大津からはそれほど

離れてはいない、しかも交通の要衝でもあった木ノ芽峠で茶屋をし、女房を呼び寄せたという大胆さである。義父の篠原屋の勘吉や仲人の古手六次など、登場人物すべてが悪人とも言いうるこの一章の世界はきわめてアナキーであるといつてよい。

『懷硯』に見られる綱吉の忠孝奨励策への批判については、すでに指摘がある(注21)。しかし、『集』としての『懷硯』の世界の表すものは、単に忠孝にかかわるものだけではない。さまざまな話題が相互に響きあい、そこに浮かび上がるものが「同時代」として意識されるならば、これはまさに延宝八年以来の綱吉の治世の全体像を見せていることになる。

七、結語——『懷硯』の持つ危うさ

スキャンダラスな現実を描き出すにあたって伴山という虚構の見聞者を設ける、ということからすぐに想起されるのは、いわゆるカモフラージュの手法であろう。幕政への揶揄や皮肉になりかねないようなことがらを述べる以上、当然、西鶴自身の述懐ととられるような書き方は避けなければならない。

そういった側面は確かにあったのかもしれない。序文の削られた署名の問題なども、あるいは関連させて考えれば面白いのかも知れない。ただここで問題にしたいのは、カモフラージュをほどこさねばならないような状況を逆手にとって、いつそう「毒」を含んだ叙述を成しえたのではないか、ということであ

る。事実を素材とし、出版取り締まりを意識してのカモフラージュをほどこすこと以上に過激な手法——危うきに遊ぶように、あえて思わせ振りの書き方をした虚構の世界を限界まで試みようとしているのではないだろうか。

もちろん、今後も調査を重ねれば、モデルとなった何らかの事件を見つけたことが出来るかもしれない。しかし、それは恐らくは原型をほとんど止めないほどに変えられてしまっているはずである。また、そのモデルを突き止めることと『懷硯』を読むことは別のことだといえるだろう。「文字すわる松江の鱸」の例からもわかるように、やや古びた仏教説話を武士の困窮と結び付けて当代のものとして描き出す、ということが行われているのである。現実以上に危うい、ありえそうな嘘が記されているといってもよいだろう。

そしてこのような「同時代」への関心は、当時の読者の間においても高いものであったと思われる。

『御仕置裁許帳』によれば、天和二年戊十二月十二日に、牛込天龍寺前山伏町の正木惣右衛門という者が、諸国巡検使に随行して見聞した道中十ヶ国の記録を書物二冊に清書して売り、罪に問われている。將軍の代替わりに際して全国に派遣される諸国巡検使は、単に形式的なものにとどまらず、宗教寺社・産業流通・地理地誌・農村の状況・災害・領主の言動・家臣役人の善悪・孝行忠義の実態などについて詳しく調査が行われたという(注22)。このような情報はやはり人々が関心を持たずにはい

られないものであったのだろう。また、それが実態であればなおさら、幕府としては流布するのを取り締まらねばならなかった。

そのことを考えるならば、『懐硯』という作品は、虚構という手法を充分に生かして、当時の読者が知っていたがっていた危うい「同時代」の姿を創出して見せたもの、ということができさうである。

注

注1 前田金五郎『西鶴語彙新考』勉誠社・一九九三年

注2 箕輪吉次『西鶴選集 懐硯（翻刻）』おうふう・一九九五年

注3 宮城音弥『夢』（第二版）岩波新書・一九七二年

注4 拙稿『懐硯』研究史ノート（1）（3）（『国語国文学報』第五九集・二〇〇一年三月、『愛知教育大学研究報告』第五一輯・二〇〇二年三月、『国語国文学報』第六〇集・二〇〇二年三月）参照。

注5 片岡良一『井原西鶴』至文堂・一九二六年

注6 暉峻康隆『西鶴 評論と研究（上）』中央公論社・一九四八年

注7 注4の拙稿参照

注8 篠原進『午後の『懐硯』（『武蔵野文学』四三号・一九

九五年十二月）平林香織『懐硯』における話のネット

ワーク』（『長野県短期大学紀要』第五二号・一九九七年十二月）

注9 注6と同。

注10 西島孜哉『西鶴 環境と営為に関する試論』勉誠社・一九九八年

注11 堀切実『芭蕉の仮定表現』（『表現としての俳諧 芭蕉・蕪村』岩波現代文庫・二〇〇二年）

注12 「見て帰る地獄極楽」試論——『懐硯』巻四の五の素材と伴山の役割——『国語国文学報』第五八集・二〇〇〇年三月）

注13 このことについては、すでに平林氏の指摘がある。平林香織『懐硯』の時間——巻三の三「気色の森の倒石塔」を中心として（『文芸研究』一三六号・一九九四年五月）

注14 実際には持国天と多聞天であった（『擁州府志』）。

注15 市古夏生『懐硯』における状況設定——「三王門の綱」と「付たき物は命に浮桶」（『近世初期文学と出版文化』若草書房・一九九八年）

注16 田崎治泰『校註 懐硯』笠間書院・一九六八年

注17 注15と同。

注18 麻生磯次・富士昭雄『決定版対訳西鶴全集五 西鶴諸国ばなし・懐硯』明治書院・一九九二年

注19 今村義孝『秋田県の歴史』山川出版社・一九六九年

注20 児玉幸多『人物叢書 佐倉惣五郎』吉川弘文館・一九五

八年 大野政治『地藏堂通夜物語』崙書房・一九七八年

注21 箕輪吉次「懷硯の素材と方法」〔学苑〕五一〇号・一九

八二年六月）井口洋「懷硯」一面——「誰かは住みし

荒屋敷」の主題——」〔叙説〕十三号・一九八六年一〇月）

注22 大平祐一「江戸幕府巡検使考」服部弘司・小山貞夫編

『法と権力の史的考察』創文社・一九七七年

付記

『懷硯』の本文は定本西鶴全集、『因果物語』の本文は仮名草子集成によった。

本稿は、日本文学協会第二三回研究発表大会（二〇〇二年七月七日・日本女子大学）における発表「『懷硯』の世界」に基づいている。会場で貴重なご意見・ご助言を下さった皆様に心より御礼申し上げます。